

「日昌上人の墓碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
与野〇一	當山中興體具院日昌上人	山本蠹齋	山本蠹齋	山本蠹齋

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	一八二八・文政一一	鈴谷	妙行寺	

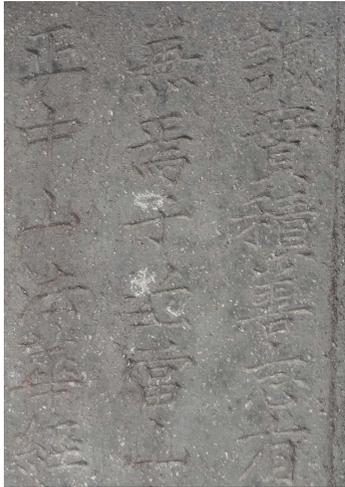
一. はじめに

本石碑は、妙行寺中興の祖と言われる日昌上人の墓碑である。

○写真1 墓碑正面



○写真2 「碑記」部分



二、翻刻並に詠注

■翻刻

◎題額

(正面)

當山

中興體具院日昌上人

◎碑記

(右側面)

誠實積善志有餘而加之以健身勤修厚可以為全美也故先哲常患於難兼焉于茲當山中興體具院日昌聖人字勝惠佐州相川之產也師於總州正中山法華經寺七十八世日逢聖人而出家薙度矣蓋進席於飯高檀林之中階研學於京師東山之本閣矣安永五丙申年聖人雖來于此寺而先是當歷代十九世忽遇祝融災諸堂一炬成焦土聖人深憫之於此發大誓願日夜抽丹誠而再建堂舍況於財器厨具哉無悉不完備緇素趣願豈可不充乎本山八十五世日虔聖人感其勤功而以賜本尊挂幅正令日昌聖人扇當山復興之祖也其後雖數薦於泉州妙國寺之任職固辭而不應傍結小房遁居日夜讀誦妙經須臾無怠焉每歲登詣身延山即集細石書寫於六萬九千三百八十四字之法華經全二部而一部投早川急流一部埋七面山麓表以小堂奉安置日蓮大士之尊像矣孚是修善忠厚大德濟勝健身之教主也可謂能盡全美矣殊能書法因是遠近諸子觸教受者數百人壽八十一實文政五壬午年正月六日也定翌而示寂了焉

文政十有一年歲次戊子三月二十八日 尾張山本蠹齋謹撰併書

(背面)

文政十一戊子年三月二十八日

當山二十六世日正建立

●異体字等

- 火 人。
- 無 兼。
- 華 華。
- 盖 蓋。
- 京 京。
- 土 土。
- 發 發。
- 器 器。
- 無 無。
- 妙 妙。
- 聖 坐。

■詠注

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

◎題額

當山中興體具院日昌上人

◎碑記

誠實積善志、有餘。

而加之以健身勤修厚、可以爲全美也。

故先哲常患於難兼焉。

于茲、當山中興體具院日昌聖人、字勝惠、佐州相川の産也。

師於總州正中山法華經寺七十八世日逢聖人、而出家難度矣。

蓋進席於飯高檀林之中階、研學於京師東山之本閣矣。

安永五丙申年、聖人雖來于此寺、

而先是、當歷代十九世、忽遇祝融災、諸堂一炬成焦土。

聖人淡憫之、於此發大誓願、日夜抽丹誠而再建堂舍。

況於財器厨具哉、無悉不完備緇素。

趣願豈可不充乎。

本山八十五世日虔聖人、感其勤功、而以賜本尊挂幅、正令日昌聖人扇當山復興之祖也。

其後雖數薦於泉州妙國寺之住職、固辭而不應。

傍結小房、遁居、日夜讀誦妙經、須臾無怠焉。

每歲登詣身延山、即集細石、書寫於六萬九千三百八十四字之法華經、全二部。

而一部投早川急流、一部埋七面山麓表、以小堂奉安置日蓮大士之尊像矣。

孚是修善忠厚大德濟勝健身之教主也。

可謂能盡全美矣。

殊能書法。

因是遠近諸子、觸教受者數百人。

壽八十一、實文政五壬午年正月六日也、定坐而示寂了焉。

文政十有一年歲次戊子、三月二十八日

尾張山本蠹齋謹撰併書。

文政十一戊子年三月二十八日

當山二十六世日正建立

●訓詁

◎碑記

誠實にして積善の志に餘り有り。

而して之に加ふるに健身、勤修の厚きを以てすれば、以て全美となすべし。

故に先哲は常に難ね兼きを患ふ。

茲に、當山中興の體具院日昌聖人、字は勝惠、佐州相川の産なり。

總州正中山法華經寺七十八世日逢聖人に師して、出家難度せり。

蓋し席を飯高檀林の中階に進め、京師東山の本閣に研學す。

安永五丙申年、聖人此寺に來ると雖も、

是よりさき、當歴代十九世、忽として祝融の災に遇ひ、諸堂一炬にして焦土と成る。

聖人ふか深く之を憫あはれむ。此において、大誓願を發し、日夜 丹誠を抽して堂舎を再建す。

況んや財器厨具においてをや、悉く完備せざるは無し。

緇素の趣願、豈に充たさざるべけんや。

本山八十五世日虔聖人、其の勤功に感じて、以て本尊の挂幅を賜ひ、正に日昌聖人をして當山復興の祖とあや扇がしむ。

其の後、數々泉州妙國寺の住職にすす薦めらるると雖も、固辭して應ぜず。

傍に小房を結びて遁居し、日夜妙經を讀誦して、須臾も怠る無し。

毎歳、身延山に登り詣り、即ち細石を集め、六萬九千三百八十四字の法華經を書寫すること、全二部なり。

而して一部は早川はやかわの急流に投じ、一部は七面山麓に埋め、表するに小堂を以てして、日

蓮大士の尊像を奉じ安置す。

孚まことに是れ、修善しゆぜん忠厚大徳濟勝健身の教主なり。

能く全美を盡すと謂ふべきなり。殊に書法を能くす。

是に因りて遠近の諸子、教受に觸るる者數百人なり。

壽八十一、實に文政五壬午年の正月六日、定じようざ坐して示寂し了れり。

文政十有一年歳次戊子、三月二十八日

尾張山本蠹齋謹みて撰し併びに書す。

文政十一戊子の年三月二十八日、

當山二十六世日正建立す。

## ●人物

○總州正中山法華經寺七十八世日逢聖人 順了院勝惠。天明五（一七八五）年、五十八歳で歿しており、生年は享保六（一七二二）年。法華經寺七十八世住職で、八十一世再住。

他に堺の広普山妙國寺二十四世住職もつとめている。

○當歴代十九世 妙行寺歴代住職墓域に、「施主日昌」と刻まれた、十六世から十九世の墓がある。そこには「十九世日崇寛政九年己九月廿四日」とあり、十九世は日崇であった。また「十八世日應明和六年丑十月十四日」とある。これは没年だろうから、日崇の妙行寺

住職就任は日應の没後、一七六九年以後となる。また、日崇の没年は西暦一七九七年にあたる。妙行寺の火災が安永五年か六年で、日昌上人の妙行寺住職就任がその年だとすると、日崇は火災後住職を日昌に譲り、なお二十年あまり存命していたことになる。

○本山八十五世日虔聖人 本是院泰静。文化十二（一八一五）年、七十六歳で没しており、生年は元文五（一七四〇）年。千葉飯高檀林妙雲山飯高寺二百十三世住職、千葉真間山弘法寺四十世住職、堺妙國寺二十五世住職もつとめた。

○尾張山本蠹齋 不詳。

○當山二十六世日正 妙行寺に立つ日正の墓石には「堺妙國寺卅二世 當山二十六世 正禪院日正聖人 嘉永二歳次己酉 正月二十三日」と記されている。ただし、『日蓮宗事典』の「広普山妙國寺」の項には「三十世 本章院日任 嘉永二（一八四九）寂」「三十二世 順妙院日泰 元治元（一八六四）寂」とあり、日正の名は見えない。

●注

- 誠實 まごころがあつてまじめなこと。
- 積善 善行を重ねる。「周易」坤卦文言伝に「積善之家、必有餘慶（善を積んだ家では必ず福が子孫に及ぶ）」とある。
- 健身 熟語はないが、健やかな身体。
- 全美 完全に美しいことだが、「美」は立派の意味がある。ならば、完全に立派。
- 先哲 特に誰かを指しているわけではなく、一般的に述べているのであろう。
- 難兼 心・精神的な正しさと身体的な頑強さを兼ねるといふことだろう。
- 佐州 佐渡の国。
- 相川 佐渡北部の地名。もと小さな漁村だったが、金鉱が発見され、金山が開かれてから栄え、江戸時代中頃は、当時としての大都市であった。
- 師 師事する。
- 總州正中山法華經寺 現千葉県市川市にある日蓮宗大本山の寺院。千葉氏の被官であった富木常忍が、日蓮のために自邸に法華堂を造営し、彼に安息と執筆の場を提供したのが始まりとされる。日蓮の没後、常忍は出家し、法華堂を法華寺と改め、初代住持となる。室町時代には、法華經寺の寺名が誕生し、中山門流の祖として栄え、末寺は三百を超えたと言われる。
- 薙度 薙髪得度の略。髪を剃って出家すること。
- 進席 入学することだろう。
- 飯高檀林 天正八（一五八〇）年に開かれた日蓮宗僧侶の学問所。明治七（一八七四）年廢壇。現千葉県匝瑳市、かつての八日市場町にあった。
- 中階 不詳だが、檀林の学校を指すだろう。
- 研學 熟語は無いが、研鑽学問につとめたことだろう。
- 京師東山之本閣 閣は、中央官庁、また高殿。ここでは、本閣で、本殿くらいの意味であろう。現在、京都市東山区にある本圀寺を指すと思われる。本圀寺は、日蓮宗大本山（靈跡寺院）で、山号は大光山。日蓮が鎌倉に築いた法華堂が起源とされ、貞和元（一三四五）年、四祖日静のときに京都へ移った。六条門流の祖として皇室からも尊崇され、日蓮宗西の拠点として栄える。門流所属の学徒を教育する学室が設けられ、永祿年間（一五五八〜七〇）には、特に「学道」と呼ばれ、多くの学徒を集めて教育した。
- 安永五丙申年 西暦一七七六年。日昌は、三十五歳。
- 祝融 中国の伝説上の火の神。転じて火事を言う。
- 當歴代十九世忽遇祝融 妙行寺に立つ「天明元年題目塔」に「東永山碑銘並序」という文章が記されている。それによれば、火災は安永六年のことで、再建のために日昌上人が派遣されてきたという。本碑の「日昌上人が安永五年に妙行寺に来た」とする記述と食い違いがある。
- 淡 淡は、流れる。文意が通じない。淡の誤記ではないか。淡は、深い。今これに従う。
- 憫 気の毒に思う。
- 大誓願 おおいなる誓い。
- 抽 抜き出す。抽心は、こころ、まごころを表すこと。
- 丹誠 まごころ。

- 財器 財産器物。
- 厨具 熟語はないが、鍋釜などの厨房の道具のことだろう。
- 緇素 黒い衣と白い衣。僧侶と俗人。
- 趣願 熟語はないが、意図や願い、だろう。
- 勤功 仕事を励み行う。功は事に同じ。
- 本尊 日蓮宗では、三宝尊。三宝は仏・法・僧だが、日蓮宗のある解釈では、釈迦如来・法華経・日蓮を三宝にあてる。
- 挂幅 掛幅。掛け軸。仏画と、「南無妙法蓮華経」の文字、及び日蓮の画像が書かれているのであろう。
- 扇 あおぐ。宣揚する、と解した。
- 泉州妙國寺 日蓮宗由緒寺院。山号は広普山。永禄五（一五六二）年の建立開山。大伽藍を誇ったがしばしば火災にあい、灰燼に帰しては再建された。本能寺の変の際、徳川家康がこの寺に宿泊しており、寺僧などの手引きで脱出したと伝える。
- 傍 妙行寺本堂の傍らであろうか。
- 遁居 隠居。
- 妙経 ありがたいお経。法華経を指す。
- 身延山 山梨県の山であるが、日蓮宗総本山久遠寺の山号でもある。甲斐国の地頭南部実長が佐渡の流刑を終えた日蓮をまねいた草庵が始まりとされる。日蓮の布教の根拠地となり、蒙古軍退散を祈念したのもこの地であった。末寺は九百を超えたといわれる。
- 早川 現在の山梨県早川町から身延町にかけて流れる河川。富士川の支流の中でも急流であった。
- 七面山 山梨県の山だが、身延山と隣接し、一部は久遠寺の寺領である。法華経を守護するという七面大明神を祀る他、日蓮宗に関わる霊場聖地や寺院がたくさんある。
- 奉安置 奉じて安置する。
- 修善 善を行うこと。
- 忠厚 まごころがあり、親切で丁寧。
- 大徳 優れた徳を備えた人。仏教では高僧、長老などの敬称。
- 濟勝 名勝を渡りあるく。
- 教主 教化を施す人。僧侶のこと。
- 教受 熟語はないが、教授と同じではないか。
- 文政五壬午年 西暦一八二二年。八十一歳で亡くなっており、生年は、寛保二（一七四二）年。
- 定坐 正身端座、座禅。
- 示寂 寂は寂滅、円寂の略で、ニルヴェーナ（静まること、やすらぎ）の意。ニルヴェーナを示現することで、特に高僧が亡くなること。
- 文政十有一年 西暦一八二八年。

## ●口語訳

### 【「全美」の人格の難しさ】

まごころがあつて真面目で、子孫に余慶が及ぶほど善行を積むことに志す。さらにこれに健康な身体と慎みつとめることが手厚いということになれば、「全美（完

全に立派な人物)」だと言えるだろう。

先哲たちは、こうした美德を完備することの難しさに思いを悩ませ続けたのであった。

#### 【日昌上人の紹介】

ここに紹介する当山中興の人、日昌上人は、字は勝恵で、佐渡の相川の出身である。

下総中山の、正中山法華経寺七十八世日逢聖人に師事して、出家得度した。

次いで下総飯高の飯高檀林に入学して法を学び、さらに京都東山の本圀寺で研鑽を積んで学問を深めた。

そして安永五年丙辰の歳、この妙行寺に住持として赴任したのである。

#### 【妙行寺の火災灰燼と日昌による再建】

それより以前のことだが、当妙行寺十九世日応のとき、突然火災が発生し、伽藍はすべて灰燼に帰し、焦土となってしまった。

そこへ赴任された日昌上人は、深くこのことをいたみ、再建するとの大いなる誓いを立て、日夜真心を尽くして奮闘し、ついに堂舎を再建するに至った。寺の財産器物や修行・生活の道具などもすべて完備した。

僧侶や檀家たちの、再建の願いは、見事に果たされた。

#### 【日昌上人の顕彰】

妙行寺の本寺である法華経寺八十五世の日虔聖人は、日昌の励んだ仕事に感じ、本尊の掛け軸を賜り、それによって、日昌聖人を、妙行寺「復興の祖」として宣揚した。

#### 【再建後の日昌上人の事跡】

そののち、和泉国の堺にある由緒寺院妙国寺の住職に推薦されたが、上人は固辞してそれに応じられなかった。

そして本堂の傍らに小さな僧坊を作って隠居し、日夜法華経を読誦して、少しも怠るところがなかった。

毎歳身延山に登り、久遠寺に詣った。細かな石を集め、六万九千三百八十四字の法華経を写したものの二部を作成した。そして一部は、身延山を流れる早川の急流に投じ、もう一部は、七面山の麓に埋め、小堂を立てて印とし、その小堂に日蓮大士の尊像を奉じて安置した。

#### 【全美の人、日昌上人】

まことに日昌上人こそ、善を行い、まごころがあつて親切で、優れた徳を備え、身延山などの聖地を渡りあるく健やかな身体を持ち主の大僧侶である。完全に立派な「全美」を体現した人物だというべきであろう。

#### 【書の教師としての日昌上人】

上人は特に書法に優れていた。

そこで、上人の教えに接しようとして遠近からやってくるものは数百人に上った。

#### 【上人の示寂】

御年八十一歳のとき、文政五年壬午の歳の正月六日、身を正して端座し、座禅のまま静かに逝去した。

#### 【記事】

文政十一年戊子の歳三月二十八日、尾張藩の山本蠹齋が、謹んで撰文し、並びに文字を書いた。

文政十一年戊子の歳の三月二十八日、当山二十六世の日正が建立した。

### 三. 資料

(一) 「新編武蔵風土記稿」巻一五五 足立郡之二十一 與野領

◎鈴ヶ谷村…寺院

○妙行寺

「日蓮宗、下總國中山法華經寺末、東永山心淨寺と號す、慶安二年<sup>\*1</sup>八月寺領十石の朱印を賜ふ、本尊三寶及び祖師の像を安ず、往古は禪宗なりしが、應永の頃僧日英なる者改宗せしより是を開山とす、同じき三十年<sup>\*2</sup>八月十日示寂せりと、墓所に善行院道榮□□壬子<sup>\*3</sup>十二月十二日太田十郎<sup>\*4</sup>殿家中森筑前守<sup>\*5</sup>とほりたる石碑あり、是は村民儀右衛門が先祖なりといえへども、其詳なることを知らず、「鐘樓」享保年中再造の鐘をかく、」

\*1 慶安二年 西暦一六四九年。

\*2 応永三十年 西暦一四二三年。

\*3 □□壬子 北条氏房生誕後の直近では、慶長十七(一六一二)年が壬子の歳。

\*4 太田十郎 北条氏房か。永祿八(一五六五)年から天正二十(一五九二)年。別名、菊王丸、十郎。

北条氏政の四男で、太田源五郎の養子となる。岩付城主。「軍記物等には「太田十郎氏房」とあるが本人は太田姓を名乗った形跡はなく北条姓で、岩付殿と呼ばれた」(『後北条氏家臣団人名辞典』東京堂出版、二〇〇六年)。天正十五(一五八七)年に、城下の加倉に浄国寺を建立した。同年づけの、氏房が与野郷周辺の堤防築造を命じた古文書(「太田氏房印判状」)が市指定有形文化財として残されている(『与野市史調査報告書』第一集(一九七六年)、『与野市の文化財』(一九八八年)。それには宛名として「与野郷百姓中」や「小代官大窪」の名が見える。当時の与野郷は旧与野市域より広く、旧浦和市の大久保地域までを含んでいた。

\*5 森筑前守 不詳。

(二) 「武蔵国郡村誌」巻之十

◎鈴ヶ谷村…仏寺

○妙行寺

「竪四十三間横四十間面積千七百五十坪村の中央にあり日蓮宗下総国中山村法華經寺の末派なり(以下「風土記稿」から引用)」

### 四. 主な参考資料

#### ① 翻刻

・『埼玉県教育史金石史料』上(昭和四三(一九六八))。

・『与野市史』中・近世史料篇「第二編近世資料」(一) 与野の先人とその学問と文芸」

「(5) 金石文」「44 日昌上人の墓碑銘」(昭和五七(一九八二))。

#### ② 論文など

・なし。

以上

二〇二四年二月 薄井俊二訳す